

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	喜 田 恒
論文審査担当者 主 査 精神神経科学 三 村 將 医療政策・管理学 宮 田 裕 章 衛生学公衆衛生学 岡 村 智 教 衛生学公衆衛生学 武 林 亨 学力確認担当者： 審査委員長：宮田 裕章 試問日：2020年 2月12日				
(論 文 審 査 の 要 旨) 論文題名：Approach-oriented coping strategy level may be related to volume of the whole hippocampus in the elderly (問題解決型のストレスコーピング戦略レベルは、高齢者の海馬全体の体積と関連している可能性がある) 本研究では、高齢者におけるストレスコーピング戦略と海馬体積との関連を検討した。問題解決型コーピングは海馬体積との間に正の関係性を認めたが、回避型コーピングではそれを認めず、問題解決型コーピングが海馬体積の保持に役立つか、海馬が同コーピングの発現に何らかの役割を果たしている可能性が示唆された。 審査ではまず、ストレスコーピングの評価にStress and Coping Inventory (SCI) を用いた理由について問われた。本邦におけるその信頼性と妥当性については若年者を対象には検証されているものの、高齢者対象の検証は不十分である。一方で高齢者を対象に十分な検証が為された評価尺度がなく、国立がん研究センターの多目的コホート研究 (JPHC study) で用いられたSCIを採用したと回答された。ストレスコーピングの成績は変動するか、ライフイベントと関係するかについて問われた。成績は変動し、それにはライフイベントの種類や大きさが関係する。多くのライフイベントを経験した高齢者の方がコーピング戦略の水準は高いと考えられるが、本研究では十分な情報取得や検証を行えておらず、追跡調査での情報取得など、今後の検討課題としたい旨、回答された。問題解決型と回避型の正の関係性について問われた。高齢者の人生における経験が、双方の使い分けに反映されている結果と考えられる旨、回答された。ストレスコーピングは過去だけでなく現在の生活状況にも影響を受けるのではないかと、問題解決型・回避型だけでなく、それらのいずれも取ることが困難な思考停止型のようなものもあるのではないかと問われた。審査員指摘の通りであり、現在の仕事や関心域の有無、ストレスサー別の対処行動の違いといった情報を加味した検証を要し、今後の課題としたいと回答された。認知症・うつ病だけでなく、軽度認知障害の対象者も除外した解析が必要ではないかと問われた。本研究では自記式評価尺度の妥当性の観点から認知症・うつ病の対象者を除外した解析を行ったが、認知機能と海馬の強い関係性を考慮すれば審査員指摘の通りであり、今後の課題としたい旨、回答された。ストレスコーピングと関連がある、海馬以外の脳部位について問われた。コーピングそのものではないが、レジリエンスは前頭葉などとの関連が示唆されているので、本研究でも引き続き解析を進めていきたい旨、回答された。最後に、5年後に予定している追跡調査について、ADLや認知機能が下がることでの追跡率の低下が懸念されるが、その対策について問われた。今回同様の会場調査だけではなく個別訪問も行うなどして追跡率の向上に努める旨、回答された。 以上、本研究には今後さらに検討すべき課題が残されているものの、脳の形態学的な画像所見とストレスコーピング戦略との関連が、本邦高齢者の大規模集団において示された点で、有意義な研究であると評価された。				